
聖帝様、お茶を飲む

想月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖帝様、お茶を飲む

【Nコード】

N6309S

【作者名】

想月

【あらすじ】

200XX年、世界はあらゆる災害に見舞われた。地は裂け、海は枯れ、あらゆる生命体は絶滅したかに見えた。だが、人類は死滅していなかった！……という聞き覚えのあるフレーズがピツタリな、暴力が支配する世紀末な世界で生きるモヒカンたちの話。

※ほのぼの路線ですよ？

1. 人類は衰退してしまいました

1. 人類は衰退してしまいました

ある日突然、人類の繁栄は終わりを迎えた。

「村が見えたぞお！」

何がその引き金になったのか、その詳細を知る者のは恐らくいな

い。

「やっと見つけたぜえ」

自分の周囲で起きた災害が世界規模で起きたのではないか、人々はそんな風に想像をめぐらせるのが精一杯だった。戦争だと主張する者もいれば、地震と言う者もいる。あらゆる通信機器が沈黙し、世界中に張り巡らされていた情報網を失った以上、人々は己が目で見、耳で聞いた以上の情報を得ることは出来なかったからである。それに、後に『大災害』と称されるそれに直面した人々は、そんなことに考えを割く暇も無かった。

「ヒヤッハー！ 水だあ」

国家という枠組みも既に無いのだろう。誰もが切望した公的機関の救助が得られることは無く、人々の前にはどこまで歩いても変わり果てた姿となった大地が広がっていた。

「俺が一番のりだあ!？」

それでも人類は滅んではいなかった。多くの人を、物を失って、心にも身体にも傷を負いながら、それでも尚、生きることをあきらめなかった。

それから二十年。世界は暴力が支配するようになっていた。

「オラオラ、道を空けろ。この旗が見えねえか。俺達は聖帝軍の調達部隊だぞお」

力こそが正義。弱いことは罪。力無き者が悪。裁く者もない世界では、力こそが唯一の法だった。

「その女あ、タンクをよこせえ！」

小さな村に、土煙を上げてスキンヘッドやモヒカンなどの男達が侵入した。村の入り口に馬を繋ぎ、馬に引かせていた荷車を引きながら向かうのは集落の生命線である井戸。飲み水が滾々と湧き出るそれは、今の時代金鉱脈よりも遥かに価値がある。

男達は井戸を取り囲むと、ちょうど水を汲もうとしていた女性達からポリタンクを奪った。新たに生産されていない以上、現存しているポリタンクも貴金属にも勝る価値がある。

「テメェら、水を汲めえ」

「漏斗の準備はバッチリだぜえ！」

スパイク付きのショルダーガードなど、攻撃的な服装に身を固めた男達に女達は怯えたのか、抵抗する素振りも見せず井戸の傍から

離れて場所を譲った。

「汲んだ水はどんどん運ベツ！ 空のタンクはまだまだあるぞぉ」

水で満たされた重いタンクは、荒くれ者達によって次々と民家へと運ばれていった。貴重な資源を手で満足したのか、男達は唇を歪め、凶悪な笑みを浮かべている。奪い取ったタンクに水を満たした後は、自分達が持ってきたタンクを取り出し、時折交代しながら作業を進めていった。

「これで最後だぁ。溢して無駄にするんじゃないぞぉ」

「ヒヤッハー！ 終了だぁ」

最後のタンクを運び終えて、男達は額の汗を拭った。
そこに手拭が差し出される。

「はい、ご苦労様」

続いて目の前に出されたのはお盆だった。その上では沢山のおにぎりが湯気をあげている。運んできたのは最初にタンクを奪われた女性だった。白いものが混じり始めた髪を風になびかせながら、目じりに皺を寄せて微笑んでいる。

「水汲みを代わってくれてありがとう。ここは男手が少ないから助かるわ」

その後ろからも続々と村人が現れ、食べ物や水を載せた皿や盆を運んできている。

「ば、バッキヤロォ！ そんなんじゃない、ねえよ」

そう否定するモヒカンだが、サングラスの下から覗く目尻は赤くなっている。

あらあら、と頬に手を添え微笑む女性。

「んなことより、後で聖王様からの物資を確認しやがれ。確認不足で足りねえもんに気づかなかったらぶっ殺すぞお」

「はい、気をつけるわね。心配してくれてありがとう」

二人の視線の先には男達が運んできた荷物がある。荷車から下ろされたそれは、この村では生産されていない種類の食料や医療品などが中心となっている。次に部隊が来るのは、予定では一月後。不足があった場合、いま伝えておかなければ村人達は不便な思いをすることになるだろう。

「頼まれていた分の織物はできているから、後で持ってくるわね。今の時期にぴったりの物ができたのよ。今までで一番の自信作ッ。いい色に染まったのよ」

貨幣価値も崩壊して久しく、物々交換がいまの主流だ。この集落では染織で交換を成立させていた。もっとも、出荷される量から考えれば、運ばれてきた物資は破格だが。

「交易を始めて本当によかったわ。生活が凄く楽になったし。本当、助かっているわ」

「だから気にすんじゃないよ。これはせーとーな取引なんだからよ！」

誤魔化すようにおにぎりを頬張るモヒカンを見ながら、女性は微笑んだ。

生活が楽になったのは本当だけど、それよりもっと楽になったものがある。本当に感謝しているのはそっちの方だ。

何もかもを失って、生きる意味を見失った。それでも死ぬことはできなくて、同じような境遇の人間同士で肩を寄せ合って生きてきた。村人以外に人を見かけることはなく、世界に自分達しか生き残っていないんじゃないかと思うと気が狂いそうになった。だから何も考えないようにして、感情も凍らせて、何でもいいから作業に打ち込んだ。それには複雑で繊細なものがいい。この村で染織が行なわれていたのは現実逃避のためだった。そうして何年も、何年も過ごしてきた。

しかしどうだろう。最近、楽しいのだ。染織が。自分達が作る物を誰かが楽しみに待っている。そう思うとやる気がどんどん湧いてくるのだ。最近では村の中で笑い声が聞こえるようになってきている。

その変化を齎したのが目の前の彼らのような若者達だ。言葉遣いは少々乱暴だが、行動の端々から優しさが見え隠れしている彼ら。自分達の子供や孫が生きていればちょうどこれぐらいの歳だっただろう。

そう思うと、みっともない姿は見せなくなかった。彼らの前では大人らしくありたかったのだ。

「ようやく暖かくなってきたわねえ」

暦の上ではもう春だ。今年はまだ肌寒い日々が続いているが、昼間の風には少しずつ暖かさが混じり始めている。見上げた木の芽は少しずつ、いつか迎える開花に向けて成長していた。

1. 人類は衰退してしまいました（後書き）

web小説には不慣れなもので、改行等が手探り状態となっております。見辛かったり、なにかアドバースがございましたら、よろしければご指摘をお願いいたします。

2. 思い出がポロポロ

2. 思い出がポロポロ

『大災害』の際に多くの建造物は倒壊したが、全てが例外なく、という訳ではなかった。『聖都サザンクロス』と称されるそこは、そんな例外の一つで、町の一部分が殆ど無傷で残っていた。そこを中心に新たな町づくりが行なわれ、今では人口三千人にまで成長していた。

そんな町の中心に一際背の高い建物がある。元は大企業の自社ビルだったのだが、いまではその名を思い出すものはいない。その建物は新たな主となった男に因んで『聖帝十字陵』と呼ばれていた。特に十字でもなければ墓でもないのだが。

十字陵の最上階。一面の窓ガラスの前に立ち、眼下を見下ろす男がいた。彼こそがこの主、聖帝と呼ばれる男だった。

「『大災害』からもう二十年、か」

あの年に生まれた子供もついに成人だ。自分も年をとるわけだ。聖帝は苦笑した。

「ようやくここまで来たか……」

安全な生活圏を確保して、食料の安定生産が可能になった。各種技術も向上し始め、この十字陵のように一部だけとは言え電気も復旧してきている。人々がようやく生活に余裕を持てるようになったのだ。生活の安定最優先で後回しにせざるを得なかった様々なことに、ようやく着手することができると。

さて、何から手をつけたものか。

「お茶が飲みたいなあ」

考え事をしていると、時折無性に紅茶が恋しくなる。『大災害』以前はティータイムを毎日の習慣にしていたものだが……遠征部隊に茶を探させるのもいいかもしれない。うむうむと一人で頷いた。

『大災害』によって多くのものが失われたが、娯楽や嗜好品の数々はその中でも大きな割合を占めていた。これは単純に優先順位の問題だった。茶の栽培を計画するぐらいなら米麦芋の畑を優先し、遊戯施設や遊具を修理する暇があるなら一軒でも多く住居を建てていった。

物思いに耽っていると、扉がノックされた。入室を許可すると、入ってきたのは身長が二メートルにも達する禿頭の大男だ。黒光りするノースリーブのレザージャケットから覗く二の腕には、おどろおどろしい髑髏のペイントが笑っている。ジャケットの下シャツを盛り上げる筋肉は分厚く、傍にいただけでも押しのけられるような圧力を感じる。

「聖帝様ッ！ 調達部隊のB班が帰還しました。回収した織物を持ってまいりましたので、検分をお願いいたしますッ」

「ん、ご苦労。見ておくからそこに置いていけ。下がっていいぞ」「ハッ！ 失礼しますッ」

大男が退室して、部屋には再び聖帝一人になった。部屋の扉を見て小さくため息を吐く。

「お茶よりも先に、大衆娯楽の充実が先かなあ」

先に述べたような理由もあって、嗜好品や娯楽の類は殆ど壊滅状態である。しかし、壊滅状態であっても皆無ではないというところがミソである。人間の神経は常時緊張状態でいることに耐えられない。どこかで、何かしらの手段を持って息抜きをすることは重要だ。聖王都における娯楽は宴会や祭りなどの多人数が参加するイベントが殆どである。人々が趣味嗜好に注ぐ余力を持っていない以上これは自然な流れとも言えた。息抜きをするなら皆で一斉に、と言うわけだ。皆で力をあわせて生きていかねばならないこのご時世、皆でイベントに参加することで共同意識を高める目的もあった。

しかし、ここ聖都にはイベント以外の、個人の趣味になっている娯楽があった。それは意外にも読書である。今の時勢でどうして読書を趣味にできるのか、これには聖王勢力の成り立ちに深いかわりがある。

聖帝。本名を山田康夫という。後数年で五十を迎える、見た目はどこにでもいるような中年である。実は一子相伝の拳法を極めていたり、世紀末的なこの世界で覇者を名乗るような気概に満ちているというわけでもない。元は食品の卸業者に勤めていた、お茶好きで読書好きの穏やかな気質の男だった。

経歴を見ても特別な所を持たないこの男がどうして今のような地位にいるのかと言えば、ひとえに『大災害』の時にとった行動にあった。

警察もまともに機能せず、外部との情報も途絶して、治安は加速的に悪化していった。ちょっとしたことが争いの火種になり、それが原因で少なくない死傷者が出ていた程だ。特に食料に関しては過敏に反応して『大災害』から一週間たった頃には、ビスケットを一枚持っていたが為に子供が暴力に晒される事態になっても、事件と呼ぶほどのことではなくなっていた。

康夫の住んでいた地域が都市部であり、農村と違って食料の自給が全く期待できなかったことも状況に拍車を掛けていたのだろう。生存者の思考は食料の確保に重点が置かれていた。その為には他者を害すことへの躊躇いを忘れていくほどに。

そんな状況でこの男、食料の確保には目もくれなかった。会社がビルごと崩壊し、同僚の消息も定かでない判断した後、連日何をしていたのかと言えば、半壊した図書館に足繁く通い、無事な本を片っ端から調べていたのである。きっかけは暖をとる為に本が燃やされている所を目撃したことだった。生来の本好きとして耐えられなかったということもあるが、それ以前に本がこれから先重要なものになると気付いたからだ。サバイバル技術の知識なんて無く、農作業の経験も無い、都会生まれの都会育ちの康夫は、身一つで生きていく為の知識を何一つとして持っていないことに気がついたのだ。

数日のうちに康夫は今回起きた災害が異常であることを察していた。大規模な地震が起きてから数日経過した今も救助が来ないからだ。道が使い物にならなくなっていても、被害確認のために自衛隊のヘリが飛んできてもおかしくない。にも拘らず自衛隊どころか、こういった時は真っ先にやってくる筈のマスコミ関連のヘリすら見かけない。一地域に収まらない、何か大きな異変が起きている可能性があった。であれば外部からの救援は期待できず、現状の窮地は自ら解決する必要があった。

だからその為の知識を求めた。この時、康夫の運が良かったのは町中の道は比較的無事であり、商品運搬のために乗っていたトラックも横転することがなかった点だろう。会社で扱っていた商品が手広かったお陰でトラックには水や食料が満載で、当分の間は食料の

心配をする必要がなかったことも大きくプラスに作用した。もっとも、トラックの積荷がばれれば直ぐに略奪の対象になることは明らかで、トラックの隠し場所に苦勞することにはなったが。

時に身の危険を感じながらも、康夫は各種技術の入門書や専門書を中心に厳選してトラックに詰め込んだ。その際にはどうしようもなく好きな小説や漫画も忘れない。今ここで保護しなければ風雨に晒され風化するのは明らかで、そうでなかったとしても燃料代わりに誰かに燃やされる可能性があった。下手をすれば二度と読むことができないかもしれないのだ。康夫にとっては貴重なスペースを費やす価値は十分にあった。

それから様々なことがあり、結果として康夫が保護した身寄りのない子供達や康夫の行動や考えに共感した人々、総勢五十三名による狂気に満たされた町からの大脱出劇が展開されたりするのだが、ここでは割愛する。

ともあれ命辛々脱出に成功した人々は安住の地を求めて何年にも及ぶ旅をすることになるのだが、その時一番の娯楽になったのが康夫の持ち出した本だったのだ。それは砂漠の中で乾きに喘ぐ旅人にとってのオアシスも同然だった。

つまりは皆してハマったのだ。中には人生観が変わる人間が出るぐらいの勢いで。康夫が持ち出した漫画の中には今の世界と似通った設定のものもあり、それは今の世を生きていくための指南書とも呼ばれて特に人気を博すこととなった。

その影響は皆の服装や言動、立ち振る舞いにも表れていた。所謂ごっこ遊びであり、人によってはコスプレにも手を出した。特に子供達は心に負った傷に対する癒しをそこに求めていたフシもあり、過剰なほどに染まっていた。大人たちとしても、少しでも辛い現実から解放されるなら、と寧ろ後押ししたこともあって、モヒカン

やスキンヘッドが大流行することになった。これにはさすがに冷や汗をかいた大人もいたが、一度後押しした手前、止めるに止められなかった。

結果として落ち着ける場所を見つけて自分達の町づくりに着手し始めた頃には、漫画を基に信仰のようなものが生まれていた。神を崇めるものではなく、生きる方針を示すものとして。その為、町の組織構造を作る際にも利用されることになった。旅をする中で康夫たちの同行者は増減を繰り返し、最終的には千人規模にまで成長しており、それをまとめる為にも一刻も早い組織作りが求められたからである。

そういう背景もあって町づくりは国づくりとなり、国は最高権力者に聖帝を据えて、聖都は完成した。その際、旅する集団の中心人物であった康夫が国王を務めることになったのである。

聖帝と名乗り始めてから随分な時が過ぎ、国が安定してきた今、康夫は思うのだった。そろそろ皆の格好をどうかしても良いのではないのか、と。既に個人でどうこうできる問題ではなくなっている以上、国のトップである自分が動かなければ変革はありえなかった。急激な変化は混乱を招くが、徐々にシフトしていくならば混乱の波も小さくてすむだろう。

その為の娯楽の充実だった。今一番好まれているものが読書であるならば、そこを逆手に取ってかつての常識的な格好や言動を広めていけばいいのだ。個人単位で徐々に意識の変革を促し、それに合わせて体制側も動いていけばいつかは元に戻るだろう。こういう時、国としての規模が小さいのは助かる。動くのも早ければ、結果が反映されるのも早いからだ。

いまどきの若い者は夜道ですれ違うと心臓に悪いのだ。挨拶をす

る時も、好意的な笑顔を浮かべてくれているのはわかるのだが、どうにも威圧感があって後ずさりそうになってしまう。

それに、と聖帝は数人の少女達の姿を思い浮かべた。上から九、八、六歳になる愛娘達の姿だ。まだまだ将来の話だが、いつか娘達が伴侶となる者を連れてきた時、それがモヒカンやドレッドヘアなのはちよつと、いや正直な話かなり嫌だ。娘はやらん！ 的な殴り合いがやりにくいし……。この辺り、歳をとって柔軟さがなくなったなあと思わないでもないが、中身は当然としてやはり見た目も重要だ。どうせなら誠実そうで爽やかな青年が望ましいと思うのだ。個人的な我俣じゃないかって？ そうですがなにか？

「さて、どこから手を打ったものか。……ああやっぱり。ティータイムは大切だよねえ。適度な休憩は必須だよ。肩も凝っているし、最近疲れが溜まっているなあ」

疲れが溜まると独り言が多くなる。

はあ、とため息を吐いているとノックもなしに突然扉が開け放たれた。

「おやじさま！」

「パパと呼びなさい」

勢いよく飛び込んで来たのは康夫の長女、つまりはこの国の第一王女だった。

「そんなことより、おやじさま。みんな早く着物を作りたいって待ってるよ？」

「ああそうだった。少し待ってなさい」

軽く娘の頭を撫でて執務機の椅子に座らせると、先ほど大男が運

んできた荷台に近づいた。普段ならこういった検分も専用の役職に任せているのだが、今回の織物は去年交易を始めたばかりの村の特産品で、聖都内では質が高いと評判になっていた。そこで一度、自分の目で確認しておきたかったのだ。

荷台に幾重にも積まれている物の中から一際目を惹かれた物を取り上げた。淡い桃色のそれは色むらも無く鮮やかで、そこに咲く紅白の花びらが美しい。

「確かに、これは見事な」

「きれいなねー」

ほうと息を吐いて王女も見惚れている。

「そのお花はなんていうの？」

「これは桜といってね、遠い昔からの春の風物詩だよ」

「ふうぶつし？」

「えーとだね、春といったらこれッ、と思い浮かぶものことだよ。ここが日本と呼ばれていた頃は、春といえば桜のイメージがあったんだよ」

へー、と感心したように花の意匠を眺める王女。

「きれいな花だね」

「実物をもっと凄いのよ。特に風に吹かれて花びらが舞う様子は本当に綺麗だね、一度見たら忘れられないよ」

その光景を想像しているのか、首をひねりながら何やら考えている王女。その姿を微笑ましく思いながら、康夫は他のものの手触りや意匠を確認していった。

検分は三十分程で終わり、聖王は娘に声をかけた。

「見終わったけど、これは鮮花が持っていくのかい？」

「うん？ ……うん、わたしが持っていくよッ。そんなに重くもないし」

元氣よく椅子から立ち上がった王女――鮮花――は荷台の取っ手を握った。

「じゃあね、おやさまッ」

「だからパパと呼びなさいと」

反射的に返された康夫の言葉に反応する様子もなく荷台を押してえっちらおっちら部屋を出て行く鮮花。その後姿を見て、何処かで転ぶんじゃないかと心配するのは過保護だろうか？

「重いようだったら誰かに手伝ってもらうんだよ。私の名で許可するから」

「だいじょぶだいじょぶ。……そう言えば部屋に入る前に言ってた、ていーたいむって何？」

部屋の入り口で振り返る王女。独り言が外に漏れていたのかと内心で反省しながら聖王は答えた。

「お茶を飲んで休憩する時間のことだよ。パパはお茶を飲みながら、ゆっくりと本を読むのが大好きでね。昔はよくティータイムをとっていたものさ」

「ほー」

わかったのか、わからなかったのか。フムフムと頷きながら、今度こそ王女は部屋を後にした。聖王はその背中に前を向いて歩きな

さいと声をかけると、机に積まれた書類仕事の続きを始めるのだった。

3. とある聖都の第一王女

3. とある聖都の第一王女 プリンセス

聖帝が治める帝国の第一王女こと鮮花は近衛隊の訓練場へと向かっていた。大人たちに織物を届けて暇になったのだ。本来なら勉強の時間だったが、先生は用事でどこかに出かけたらしく中止になった。降って湧いた自由時間に足取りも軽く、自作の自由時間の歌を口ずさむ。リズムに合わせて、白いリボンで一つに結んだ艶やかな髪が背中で軽やかに踊っていた。

周囲はそんな彼女を見て微笑ましい視線を送っている。すれ違う人々に対して一々元気よく挨拶をしながら辿り着いたのは、周囲を高い塀で囲まれた広場だった。塀の中では三十人ほどの男達が訓練の真っ最中だった。ぶつかる拳。弾ける汗。流れる血潮。轟く罵声と響く怒声。いつも通りの光景だった。そんな光景にも臆することなく、トテトテと足を踏み入れていった。

大柄な男達の中にあって一際目立つ巨漢がすぐに鮮花に気がついた。

「おっ、姫さん。てめえら挨拶だ！」

「「「チーッス」」」

号令にあわせてすかさず整列する男達。

「みんな、おはよーッ。気にしないでいいから訓練を続けていいよ？」

「」「あざーっす」「」

鮮花の言葉に従って再び男達は訓練に戻っていった。

「今日はどうしたんですかい？ お勉強の時間だったんじゃないやせんでしたか」

「先生が用事でお出かけしたから中止になったの」

ああなるほど、と頷く巨漢は王族の身边を警護する近衛隊長だ。名を心と言う。通称ハート。名前のルーツは信仰の発信源となった漫画から来ているが、名前とは裏腹に拳法殺しの肥満体系というわけではない。むしろ最低限の脂肪を残した肉体は鋼の如き肉の鎧に覆われている。

「それでね、お話があるの」

「なんですかい？」

声を潜めて話す鮮花に首を傾げながら耳を寄せる為に膝を着くと、その肩に鮮花は飛び乗った。身体のサイズが余りに違うため、そうした方が話しやすいのだ。

「立って立って」

「うっす」

肩の上の鮮花が落ちないように腕でしっかり保持しながらハートは立ち上がった。目線の高さがあがり、高い高いと鮮花がはしゃぐ。

「それで、どうしたんですかい？」

「あのね、おやさまにプレゼントしようと思うの」

「何か行事ってありやしたっけ？」

厳しい冬を乗り越えたことを祝う春迎えの祭りを最近やったばかりだ。次の祭りはまだまだ先の話だった筈。

「そうゆうのじゃないよ」

頬を膨らませて不満を表す鮮花。

「最近おやじさまが疲れているから、元気を出してもらおうと思ったの」

「なるほど、いい考えじゃあねえですか」

「でしょでしょ！」

同意をもらえたことに鮮花は諸手を挙げて喜んだ。

「それで、俺たちに何の御用で？」

我が意を得たり、と頷きながら鮮花は先ほど康雄と交わした会話を話を話し始めた。話は子供ゆえに支離滅裂で、全体像を掴むのに苦労しながらも何とか要点を整理すると、

「その、ていーたいむってえやつをやりてえと」

「うん、ぜったい元氣が出るよ！」

元氣一杯花丸印で頷く鮮花。言いたいことはわかったが、

「それで俺たちに何を手伝えと？ すいやせんが、俺たちもていーたいむってやつを知りやせんし、お茶って言うのもどんな飲み物なのか知りやせんぜ？」

「だから調べるのを手伝って欲しいの。あと、準備も。たぶん外に

出ないといけないし」

調べるのを手伝うのは構わないが、ハートは眉を顰める。問題は後半だ。ちよつとぐらいの外出なら付き合うが、茶なんて飲み物はここらで聞いたことが無い。探しに行くなら恐らく数日単位の遠出になるだろう。聖帝の勢力圏内から一步でも出たら何が起きても不思議ではない。鮮花が怪我でもしたら一大事だ。

「姫さん。手伝うのは構いやせんが、外に出るのは危ないですぜ？」

「えええええ」

「遠出の必要があったら俺たちで行って来やすから、お嬢は待って下さいよ」

「いや！」

不服な顔をしているが、ここは頷いてもらわねば。

「何が起きるかわかりやせんし、姫さんが怪我でもしようものなら大変ですぜ」

「大丈夫だもん」

ブンブンと首を横に降る王女様に対して、どうしたものかと頭をひねる。

「怖い動物がわんさといやすぜ。噛まれたら痛いですぜえ？」

「平気だもん」

「野党だっていますし、攫われたら何をされるやら」

「攫われないよ」

「遠出する必要があるとすると、下手すりゃ野宿になりやすぜ？」

姫さんは真っ暗なのが怖いでしょ？ 夜の森はそりゃあ暗いですぜえ。お化けがいるかも」

「こ、怖くなんてないし」

この王女、強情である。

困ったものだ。図書館の眼鏡みたいに口が回らないのだ。自分は、いつも仕事部屋に閉じこもっている友人の姿を思い浮かべながら、内心で溜め息を吐いた。

「それに、姫さんが危ない目にあったりしたら聖帝様が悲しみますぜ？ プレゼントをあげて元気を出してもらおうってえのに、悲しませちゃあ意味が無いんじゃないですかい？」

「危なくないもん」

「姫さん……」

「だって、みんながいるし」

当たり前のように言われて、言葉に詰まってしまった。本当に、困ったものだ。説得が難航しているのは自分達に対する信頼のせいだとは。まいったまいった。

思わず頬が緩みそうになってしまっじゃないか。

鮮花を支えているのは逆の手で頬を撫でながら衝動に耐えた。

「外に行くなら私も行きたい。わたしが贈りたいプレゼントだもん。用意も自分でしたいよ」

気持ちにはわからないでもないが……。

「……だめ？」

ここで断れば鮮花も引き下がるに違いない。歳の離れた妹のように思っているこの少女は、わがままを言うにしても最後の一线だけ

は踏み越えない自制心を持っている。だが、先ほどの一言でさっきまで言えていた否定の言葉が中々口から出てこない。

自分の腰ほどまでしかない女の子。転んだだけでも大怪我をするんじゃないかといつも心配になる。でも、自分達はもつと小さくて幼かった頃に旅をしていた。まだこの国ができる前のことだ。いま鮮花が願っているものよりも危険な旅を。そうせざるを得なかった、ということは勿論ある。その危険な旅を自分達は遣り遂げた。それは何故か？ 決まっている。大人たちが守ってくれたからだ。だから、あの頃の自分たちより大きな鮮花が外に出てもきっと大丈夫。自分達を守るのであれば。それでも不安は拭えない。危ないことはして欲しくないのだ。

「ハート様、いいんじゃないやねえですか？」

「おめえら……」

会話に氣をとられて、いつの間にか声が大きくなっていた。だから氣付かれたのだろう。

「近衛隊は王族を守るための部隊ですが、守るために閉じ込めるのは違うんじゃないやねえですかい？ お嬢が外に出たいってんなら、外での危険から全力で守る。それが俺たちの役目じゃないやねえんですか？」

モヒカンの言葉にハートは秘孔を突かれた思いだった。そう、守ることと閉じ込めることは違うのだ。いつの間にか目的と手段が入れ替わっていた。幼い自分達を守ってくれた大人たちは、子供の願いを一蹴することはなかった。髪形を変えた時のように、できる限り手伝ってくれた。だからあの旅にも耐えられたのだ。

いまの時代、子どもが子供で居られる時は短い。だからこそ子ども

もの願いはできる限り叶えられるべきなのだ。自分達がそうしてもらったように。一度目を閉じると、ハートは大きなため息を吐いた。

「……明日から姫さん外出時の護衛用の訓練を追加するから覚悟しとけ。容赦しねえぞ」

「「「ウィッス!」」」」

「みんなありがとう!」

肩の上ではしゃぐ鮮花が落ちないように気をつけながら、ハートは頭を悩ませた。子煩悩な王様に娘の外出を認めさせるにはどうしたらいいだろうか、と。

「とりあえず図書館に行こう。ハート、ゴーゴー!」

「おめえら行くぞッ」

「「「ヒヤッハー! 調べるぜえー」」」」

鮮花を肩に乗せたままハートは走り出した。その後ろには近衛隊が続く。目指すは聖王都で一、二を争う重要施設、図書館だ。

4. 図書館大戦争

4. 図書館大戦争

聖王都の知識の中核である図書館。ここには各地から発掘発見された本や機械が持ち込まれており、職員は日夜調査、分類、修復に努めている。『大災害』以前の図書館のように修復修繕が完了した本などが一般にも公開されているが、どちらかといえば技術研究所の側面が強い。

ここに勤める司書は研究者、技術者としての側面が強く、『大災害』を生き抜いた各専門職の人間が多く勤めているため、他部署に比べて平均年齢も高い。例えば近衛隊の平均年齢は二十三歳になるが、図書館の平均年齢は五十四歳と倍以上になる。若手の育成も行なっているが、体力のある若者は軍隊や農作業などの力仕事に優先的にまわされている為、その数は多くない。それでも強い希望があれば図書館に所属することは可能だが、勉強よりも運動の方がよい、という若者が多いのは今も昔も同じだった。図書館への所属を希望するのは少数派だ。

「おお！ 続刊が発見されたのか。素晴らしい実に素晴らしい。今晚早速読まないとッ」

三葉はそんな数少ない希望者の一人だった。読書という行為は国民に広く愛されているが、三葉はそんな人々の中でも群を抜く本の虫だった。次々と増えていく本を誰よりも早く読みたい。その一心

で勤務を志望した。実際には技術の再現などの実験も行なわねばならず本を読むだけでは済まない仕事だったが、それでも本に触れる機会が多く、それなりに満足して日々を過ごしていた。今日の仕事は遠征部隊が持ち帰った本の分類作業だ。

「この作者、別のシリーズも書いていたのか……。しかも全巻揃っているだと！ 奇跡だ。まさに奇跡だ。今日はなんて素晴らしい日だろう！」

三葉は図書館の業務の中でこれが一番好きだった。作業をしながら読む本のリストを組み立てていく。この時間が至福だった。

「おい、眼鏡。居るかあ？」
「いるかー」

素晴らしい日、終了。

書庫の扉を開けて入ってきたのは肩に少女を乗せた巨漢だった。

「近衛隊長が何の用だ。相変わらず粗野なしゃべり方をして、姫様が真似をするだろう。王族の傍で仕えるならば、それなりの礼儀作法を学ぶべきじゃないかね？ これから伝統と格式を創っていくならスタートラインは重要だろう」

「眼鏡の話は難しすぎてよくわからん。もっとわかりやすく話してくれ」

「もっと勉強しろと言っているんだ。不良漫画とヤクザ漫画ばかり読むんじゃないかって、偶には礼儀作法の教本を読め。言葉遣いについてもいい本を紹介してやる。それなら貸し出しを許可してやるぞ。あと眼鏡と呼ぶのはやめろ」

「勉強が苦手だから軍隊に入ったんだがなあ。しかし眼鏡は眼鏡だろう。他に呼びようがあるか？」

三葉のコメカミがピクリと引きつった。

「いつも言っているだろう。名前で呼べ、名前で！ 僕をそんなガリ勉モヤシッ子のようなあだ名で呼ぶことは許さないぞ。絶対にだ！」

室内作業が多いとは言え、三葉も体つき自体は引き締まっている。ただ比較対象が悪かった。

「おめえの名前ってなんだったっけか？ ずっと眼鏡って呼んでいるから忘れたぞ。ええっと、確か、アミバ？」

「『ア』が余計だ！ 僕の名前は三葉だ。この筋肉お化けめ。クソッ、キャラの名前をもじって皆で改名しようなんて誰が言い出したんだ。悪乗りにも程があるだろう。僕は断じて偽りの天才なんかじゃないぞ！」

「名前で呼んでもおんなじじゃねえか。やっぱり眼鏡でいいだろう。俺たちの世代で眼鏡をかけているのはお前だけだし」

相変わらずよくしゃべるなあ、とハートは感心した。自分ではこんなに次々と言葉が出てこない。やはり図書館勤めは頭の出来が違うのだろう。

時々難しくて何を言っているのかわからなくなるが、ハートはこの友人を尊敬していた。その敬意は三葉本人には全くと言っていいほど伝わっていないのだが。

「ねえねえめがね」

ハートの肩から降りた鮮花にまで眼鏡と呼ばれてしまい、思わず眉間を押さえた。

「姫様まで……。私のことは三葉とお呼び下さい。私のような平民

にも親しく接していただけるのは光栄の至りではございますが、そこにもやはりはじめというものがございます」

「でもハートもみんなもめがねってよんでるよ？ わたしもめがねってよびたい」

「なりません」

「でも」

「なりません。姫様には国家の象徴としてもっと自覚を持って振舞っていただかねばなりません」

お前のせいで姫様に悪影響が、とハートを睨むが視線の先の当人が気にした様子はまるで無い。

「よろしいですか、王族と臣の間に、は……」

鮮花に訴えかけようと向き直ったところで言葉が止まる。いつの間にか鮮花の目が涙で潤んでいた。仲間はずれ、やだ。という呟きが聞こえる。このままでは涙が溢れるのは時間の問題だ。何とかしなければ、と口を開こうとした刹那、

「」「何お嬢を泣かせてんだ。ぶっ殺すぞ眼鏡え！」「」

近衛隊の面々が飛び込んできた。

「いや、これは違う……」

「こんのおガリ勉強郎が。調子乗ってんじゃねえぞ」

「消毒されてえのか、あ？ モヤシ炒めにすっぞ？」

「……」

「なにか言えや。砲丸投げ大会開催されてえか？」

「こいつヒョロイからよく飛ぶぜえ」

「じゃあ俺は『あ、新記録』って言う役やりてえ」

「……………」

「こいつ震えていやがるぜえ。ハイハイびびってんのかあ？」

「お前等表に出ろお！」

かけていた黒縁眼鏡を机に置くやいなや、親指で外を指す三葉。

「やんのかコラ！」

「ああああやってやる。久々にキレたぞ。よくもNGワードを連呼してくれたな。後悔させてやる」

場のボルテージが一気に上がった。近衛隊の面々も臨戦態勢に入り部屋から出て行こうとしたところで、

「馬鹿かおめえら！」

ハートの鉄拳制裁が割って入った。

「ハート様、痛えます」

「呼ぶまで待っているつつただろうが。すまねえな、この馬鹿どもが仕事場にゾロゾロ入ってきて。てめえら謝れ」

「いや、もういいよ」

三葉はため息を吐きながら言った。怒りの矛先を失って一気に気が抜ける。部屋から親衛隊が退室し、室内は再び三人になった。

「みば、ごめんね」

「私の方こそ申し訳ございません。神経質になりすぎていました。姫様のお好きなようにお呼び下さい」

「ありがとう、めがね」

その名の如く鮮やかな花のような笑顔が咲く。

「なんでえ、照れてんのか眼鏡」

「うるさいッ、お前が眼鏡と呼ぶな」

コホンと咳払いを一つ、気を取り直して。

「それで、大勢でいったい何の用なんだ？」

「ああ、実は姫さんの頼みでな」

「姫様の？」

「ええとね、最近おやじさまが疲れているみたいでね」

鮮花による説明が再び行なわれた。

「……なるほど、調べたいのは二点。まずティータイムとはどのように行なうものなのか。そして、その時に飲むと言うお茶がどんな飲み物なのか」

「そうそう！」

腕を組みしばらく考え込んだ三葉は、しばらくお待ちください、と鮮花へ告げると一礼して部屋を辞した。しばらくして再び戻ってきた時、台車を押しながら部屋に入ってきた。

「眼鏡、その大量の漫画は？」

「資料だ。残念ながらお茶の入れ方に対する指南書やティータイムの手引書はまだ発見されていない。世界のどこかに埋もれているとは思うんだがね。そこでタイトルにティータイムやお茶が含まれている漫画を持ってきた。ついでに料理などを題材にした漫画もある。探せばお茶に関する内容も載っているだろう。これら資料を基に類推すれば本来のティータイムを再現することができるはずだ」

「みんなでまんがを読んでティータイムがどういう物なのか想像するの？」

「さすがは姫様、ご賢察です。その通りでございます」

そこで首をひねっている筋肉魔人とは大違いだ。

「みんなで読めばすぐだね！」

「じゃあしばらく借りていくぞ」

「ああ貸し出しの手続きは既に取りっている。言うまでも無いが汚すなよ？ 本は国の重要な財産であるし、その上今回は姫様の要請だから特例で許可したが、中には複製がまだの物も混じっているからな」

「ああわかった。俺からも言うておく」

うなずきを返すとハートは荷台を押して部屋を後にした。鮮花もその後に続き部屋を出ようとしたが、扉の前で立ち止まる。

「どうされましたか？」

三葉が声をかけるとクルリと振り向いた。

「お礼を言うのを忘れてた。めがねありがとう」

そしてペコリと頭を下げる。

「……はい。もったいないお言葉をいただき、ありがとうございます
す」

「ティータイムをやる時はめがねも来てね？」

「楽しみにしております」

今度こそ鮮花は去っていった。ようやく元の静寂が戻ってきた。さて、作業を再開しなければ。闖入者達のせいで中断していたが、

今日のノルマはまだまだある。しかし一度切れた集中力は中々戻ってこない。しかし三葉がため息を吐くことは無かった。

素晴らしい日、終了。と先ほどは思ったが、偶にはこんな日も悪くない。最後に言われたお礼を思い返ししながら、そんな風に思うのだった。あくまでも偶にはだが。

そんなことをツラツラと考えながら、作業スピードが中々上がらない中でも終始穏やかな気持ちで本の分類を続けていくのだった。

それから一週間後。

聖帝十字陵内の近衛隊に割り当てられた会議室。普段はあまり利用されていないこの部屋は、最近毎日人の出入りがあった。

鮮花の外出を視野に入れて訓練を追加した近衛隊の面々は何時にも増してボロボロで、中には包帯を巻いている男もいた。皆疲れているが愚痴は零さず、今日も訓練を終えた足で会議室へと直行する。鮮花を交えての話し合いの結果、今回は招待状を出して聖帝一家を招き、茶会を開くことになっていた。

「問題は茶葉だがな、遠征部隊の知り合いに聞いた話じゃあ最近発見されたサイレント・ヒルって町で栽培されているらしい。そいつも別の斑の同僚から聞いたってだけで、それ以外の情報はねえがな」

そう言いながら懷から紙を取り出すハート。

「まあとりあえず場所はわかった。これが最新の地図だ。聖都はここで、サイレント・ヒルはここだ」

皆に見えるように机に置いた地図に指を走らせる。

「思ってたより近えんですね？」

地図を見たモヒカンが意外そうな声を漏らした。イメージでは大冒険になるはずだったのだが、地図で見る限りそんなに離れていない。聖都からでも徒歩で二週間もあれば往復できるだろう。

「日程は一週間だ。移動には馬車を使う」

「馬車っすか、めずらしいっすね」

「馬だけ使うわけじゃあねえんですね」

「姫さんがいるからな」

ああ、と納得する一同。騙し騙し使っていたガソリンがそこをついて以来、最速の移動手段が馬だ。厩舎から逃げ出した馬が野生に戻ったようで、現在の本州にはそれなりの数の野生馬がいると考えられている。帝国は総力を駆けて馬を捕獲し、かつ育成に励んでいる。

「しかし、聖帝様がよく許可してくれましたね」

「眼鏡が手伝ってくれたからな。交流がある村への見学ということになった」

説得は困難を極めたが、お陰で何とかなった。一人ではきつと無理だっただろう。眼鏡の言っている事は相変わらず自分には理解不能だったが、聖帝様が納得したところを見ると、きっと筋の通った話だったのだろう。

「出発は明後日だ。明日は一日準備に当てる。こっちでも仕事はあるし全員で行くわけじゃねえから、この後聖都に残る奴を発表するぞ」

「」「」「ういっす」「」

頷く男達を一瞥してハートは次の話題に移った。

「これで目の前の問題は片付いたが、問題はまだまだある」

「って言うത്？」

「漫画を読んで思ったんだが、ティータイムって言うのはよ、ただ茶を飲むだけじゃなくて、なんつうか、華やかな感じだったろ？茶を入れるカップを選んだり、茶を飲む場所を選んだり、茶の為に食いもんを用意したりしてよ」

つまりだ、とハートは続ける。

「ティータイムってやつはただ茶を調達するんじゃ駄目なわけだ。茶を楽しむためにはそれなりの準備が必要ってわけだ」

確かに、と一同は頷く。この一週間で目を通した数々の資料では程度の差こそあれ華やかさがあった。

「こっちに残るやつらはそうした部分の準備をしといて欲しい」

「でも俺らはそう言うのはわかりませんか？ 図書館勤めのじじい達に聞けば知ってるかもしれないが」

「でもお嬢は皆には内緒って言ってたぜ。せっかく俺達を頼ってくれてんのバラすのか？」

「そういうわけじゃねえけどよお……」

「でも折角のプレゼントなのに俺達が適当に決めて失敗したら、お嬢がかわいそうだぜ」

あーでもない、こーでもないとか色々意見が出るものの結局のところ問題は自分達にセンスが無いということなのだ。話は全く進まない。

言葉が途切れた時、会議室の扉が開かれた。

「じゃあ僕がアドバイスしてあげよう。丁度アイデアもあるしね」
「てめえ何しにきやがった」

言葉と共に入ってきたのは三葉だった。

「こんな時間にどうした？」

「偶々前を通りがかったら実りの無い話を延々としているのが聞こえてね。思わず口を出してしまった」

「んだとお」

「馬鹿にしてんのか」

色めきたつ男達をハートは手で制した。

「話が聞こえていたならわかっているだろうが、お前の他に話す気はねえぞ。秘密ってのは何処で漏れるかわかったもんじゃねえからな」

「勿論わかっているさ。僕も姫様の意志は尊重したいからね。だからさっきの説得にも協力したんだ。あれから僕も興味が出て調べてみたんだ。おかげで解かったこともある。先ほど話していた点については助言できるだろう」

「そうか、そりゃありがてえな」

「ハート様ッ」

ハートの言葉に不満の声が上がった。以前から図書館の中に籠っている三葉を軽んじる風潮はあったが、鮮花を泣かせ、さらにその件でハートから鉄拳制裁を受けることになった男達の三葉に対する印象はこの一週間の間に悪化の一途を辿っていた。

「こんな奴に手伝ってもらうことなんかねえですぜ」

「お嬢と俺だけでやりましょうよ。こっちの準備も何とか俺らでやりますから」

近衛隊以外の人間が混じるのが嫌なのか、先ほどからの問題を棚上げて、反対意見が次々と上がる。

「じゃあ、てめえら具体的な意見を一つでもいいから挙げてみる」

途端に口ごもる男達にハートは小さくため息を吐く。自分達は戦うしか能が無い馬鹿なんだから、調べても解からなかったんなら解かると言っている奴に教えてもらうしかないだろうに。

「全く話を聞かないやつらだ。僕は手伝うつもりは無い」

「ん？ どういうことだ」

「さっき言っただろ。僕は助言するだけだ。実際の作業には一切関わる気はない。毎日忙しいからね。少し作業の方向性を示すだけさ」

思い返せば確かにそう言っていた。しかし……。

「お茶には甘味が必要なようだが、君達はそのレシピを知っているのかい？　そもそも肉を焼く以外に調理の経験も殆ど無いだろう。ティーポットや急須はどうするつもりだい？　今すぐつくっても出来上がるのは一月後だよ。何かあてはあるのかい？　後は実際にお茶を飲む場所だね。先ほど華やかさが必要だと心が言っていたが、その点には僕も賛成だ。陛下に供するものであるならばそこは拘るべき部分だろう。帝都には菜園はあるが庭園はない。である以上は庭で季節の美しい花々を愛でながら、と言う訳には行かないが。しかしその点においても問題は無い。僕に秘策がある」

畳み掛けるように話していた三葉は一度言葉を切った。そして呆気にとられたように自分を見る男達の顔を一人一人見回して。

「さて、僕のアドバイスを聞いてみる気になったかな？」

最後にそう付け加えた。

場に沈黙が落ちる。三葉は返事を待ったため口を閉じ、ハートは何か考えているのか不思議そうな顔で首をかしげている。他の男達は苦虫を噛み潰したような顔で互いに顔を見合わせている。話を聞く限り三葉の提案は魅力的であり、手詰まりの現状を考えればこれ以上ない話だ。それは理解しているが、三葉に対する反発が鎮くことを拒んでいた。

「眼鏡、一ついいか？」

「なんだい？」

その中でハートが口を開いた。

「何でそんなに協力してくれんだ？」

不思議そうな顔で言葉を続ける。

「確かに資料集めにゃあ協力してもらったが、逆に言やあそれだけの関わりしかねえだろ？ さっきの聖帝様への説得にしたってよお、わざわざおめえから俺んとこへ来て手伝ってくれたし。さっきお前が言ってた通り、図書館勤めが忙しいのは間違いないだろう。ところが、だ。おめえは好きな本読む時間を削って、茶会のことを調べてくれたんだろ？ どうしてなんだ」

ハートにはさっきからその点が疑問だった。三葉は冷たいわけで

はないがお節介をやくタイプでもない。頼まれたならともかく、趣味の時間を削ってまで自分達の為に調べ物をしてくれないだろう。

例えば発案者が鮮花だとは言え、公式な行事でもない。ただ子供が父親へのプレゼントを考えただけで、三葉からすれば流れてしまっても問題は無いのはずなのだ。むしろ鮮花が外出する事で発生した聖帝の説得などの面倒が発生している。

「普段は頭の回転が悪いくせに、どうしてそういうところだけは気がつくんだ……」

三葉は誰にも聞こえないほどの小声で吐き捨てた。

「関係ないとは言ってくれるな。僕は無関係どころか君達と同じぐらいの関係者さ。立場は違うけどね」

「立場？」

「ああ立場さ。君達は茶会の主催側。それに対して僕は茶会の招待客だ。なにせ姫様から直々にお招きいただいているからね」

そう言って懷から紙を取り出した。その表面にはたどたどしい字で招待状と書かれていた。

「君達に資料を提供した翌日に姫様からいただいたのさ。だから茶会が成功しないのは僕としても困るんだ。いま茶会の為に服を注文したからね」

三葉は黙っている男達を再び見回した。話を聞いてハートも納得したのか、再び口を閉じた。三葉は言葉を続ける。

「そういうわけだから僕は僕の都合で君達にアドバイスをする。君

達は君達で自分達のために僕を利用するといいさ。君達の準備が順調であれば、姫様も喜んでくださるだろうさ。それでも決心がつかないのならば、僕の方からお願いしようか？」

「つまりは眼鏡としても姫さんの為に何かしてやりたいってことだな」

うんうんと頷くハート。

「何処を聞いたらそうなるッ」

「なんだ、俺達と同じじゃねえか」

「話を聞け！」

怒鳴られてもハートが気にする様子はない。

「おめえも姫さんのお茶会を成功させたいんだろ？ 俺達に頼んでも。じゃあそういうことだろ。素直じゃねえな」

「やめろ、僕に妙なキャラづけをするんじゃない」

「……おい」

「なんだ、いま取り込み中だ」

三葉が顔を向けると神妙な顔をした男と目が合った。その後ろでは他の人間も同じような表情を浮かべていた。

「助言をくれ……いや下さい。茶会を成功させるために、お願いしますッ」

一斉に下げられる頭。三葉は面倒そうな顔でそれを見た。

「やめてくれ、君達にそんなに畏まられると頭痛がしそうだ」

「そういうわけにやあいかねえよ……です。これはケジメで、さっきまでの態度は絶対に謝んなきゃあなんねえ、んです。じゃねえと俺達はあるたにも、ハート様にも、お嬢にも顔向けできねえ！」

「こういう面倒な所はお前そっくりだな」

「だろ？ 俺の自慢の馬鹿共だ」

「言ってる、馬鹿の総大将」

そもそも気にしていないのだから謝罪される方が対応に困ってしまふのだ。

「とりあえず言葉遣いを元に戻してくれ。無理やりな敬語は聞くだけで背筋に震えが走る」

「……あんたがそう言うなら。でも詫びは入れねえといけねえ。頼む俺達を殴ってくれ」

「僕にそんな趣味は無い。それよりそろそろ頭を上げてくれないか？ もし僕に侘びる気持ちがあるのなら、茶会を成功させてくれ。僕は茶会を楽しめればそれでいい」

その言葉でようやく男達の頭が上がった。

「いままでお高くとまったヤな野郎だと思っていたが、違ったんだな」

「眼鏡、これまで色々ごめんな」

「……それでも呼び方は変わらないんだな」

三葉は小さくため息を吐いた。

「野郎ども！ これまでも全力だったが、これからは命かけるぞ」
「」「」「おう！」「」

男達の一つになった声が室内を震わせた。

意気高揚の中で解散となった会議室には、先ほどまでの熱気がまだ残っているようだった。

「姫様の護衛、しっかりな」

「任せろ」

二人だけになった会議室で交わされる言葉は短く、

「そっちも準備は任せたぞ」

「それは彼ら次第だ。まあ僕は妥協しないけどね」
「厳しく頼む」

決定事項を確認していくように簡潔だ。

「茶を持って帰って来いよ。肩透かしはごめんだぞ」

「まあなんとかなるさ」

旅には常に危険がつきまとう。これが今生の別れになってもおかしくないのだ。だが二人は全く不安を感じておらず、旅の成功を確信していた。

「茶会、成功させるぞ」

そう言って拳を突き出すハート。

「……ああ」

三葉もまた拳を握り、二人の拳が軽く打ち合わされた。

それから、怒涛の日々が訪れた。

帝都では、

「そんなものが餡子と呼べるかッ！ あく抜きはもっと丁寧に行な
いたまえ。いいか、姫様が帰ってきたら君たちが姫様に教えて差し
上げるんだぞ。わかっているのか？」

毎日のように三葉の怒声が響き、

「こらそこッ。綺麗な置物を倉庫から見繕って来いと言ったのにフ
イギユアなんて持ってきてどういうつもりだッ。置物は置物でも違
う……なに？ ユダ様は世界で一番美しい？ 君達は本ッ当にセ
ンスが無いね。少女漫画でも読んで研究してみたまえ。ふんッ、文
句があるならベルサイユへ来てみるんだね」

一方の外出組は、

「ハート、ハート、辺りが真っ白だよ！」

「こりゃ霧ですねえ。ここいらがサイレント・ヒルのはずなんです
が、周りがみえねえとどうにも」

「あそこに誰がいるよ？ 道を聞いてみようよ。ほら、赤い三角形
の帽子を被ってる人。かっこいいね！」

「ありゃ帽子って言うより兜でさあ。すっぽり被って顔も見えねえ」
「あ、走ってくるよ！」

「でっけえ鉈を持ってやがるな。てめえら、とりあえず殴って止め
るぞ！」

「」「「ビヤッハー！」」「」

初めての外出にはしゃぐ鮮花の下、にぎやかな時間を過ごしていた。

5. 狂乱茶会日記

5. 狂乱茶会日記

満身創痍。地面に倒れ伏した男の手が、震えながら、何かを掴もうとするように伸ばされた。

「それは俺達在必死で作った食糧なんだ。た、頼む、持って行かないでくれ。それが無くなったら俺達は」

「ぎやははは、そりやできねえ相談だな。俺達あ空腹なんだよ。こんな草育てずに米でも作ってりゃあ俺達も全部持ってけなかったのかも知れねえのによお」

無造作に引きちぎられたそれは、大切に育ててきた茶だった。苦しい生活の中で、他の作物を削ってでも大人たちが守り抜いてきた大切な物なのに。食料を奪いに来た山賊達に、目の前で踏みにじられても止める事ができない。怒りと悔しさで身体が震えた。傷だらけで立ち上がれない自分が腹立たしかった。

「……おい」

「ああ？　なんだてめ」

強盗の訝しげな言葉が不自然に途絶えた。同時に聞こえたのは肉を打つ鈍い音と、何かが地面に倒れる音。

「何しやがるッ」

にわかに殺気立つ強盗たち。

怪我で意識が朦朧としていた男も力を振り絞って顔を上げた。

「お、お前は……」

「どうした三角頭。こんなところで昼寝か？」

周囲の男達を気にする素振りもなく、こちらを見ていたのは肩に少女を乗せている、雲をつくような巨漢だった。

「ハート、……お茶が」

丁寧に整備されていた畑は見る影もなく踏み荒らされていた。その惨状に少女は悲しそうに目を伏せる。

「姫さんは三角頭の傍に居てください。目は閉じて、耳も塞いで。直ぐに終わりやす」

「ま、待ってくれ。こいつらに手を出したら村の皆が」

「心配すんな。他の奴らがとっくに向かっている。ほら、ちょうど救出成功って狼煙があがったぞ」

少女を地面に下ろしながら指差す方角からは言葉の通り煙が立ち昇っていた。

「てめえら、よくも邪魔しやがって。ぶっ殺してやるッ」

「ガキは殺すなあ。色々使い道があるからよお。イロイロと、な」

一人倒れたところでこちらは五人。武装もしている。対するのは身動きできない怪我人と子供を抱えた男。いくら大柄で強そうだとは言え、拳を握って構えているだけで武器一つ持っている様子はな

い。男達の勝ち揺るがなかった。他に仲間がいるようだが、ここに来るまでにケリをつければいい。結果は決まっていた。

そう、男達が村を襲い、あまつさえ少女を下卑た目で見た瞬間に。

巨漢の拳がまた一人の男にめり込んだ。殴られた男は冗談みたいに地面と平行に飛び、数メートル先の木に背中から叩きつけられた。うめき声一つあがらない。無造作に動いたように見えたにもかかわらず、誰一人としてその動きに反応できなかった。

「な、なんっ？」

「これは、お前らに襲われた村の分」

事態をうまく飲み込めない男達が言葉にならない音を漏らしているが、そんなことはどうでもいい。混乱する男に砲弾の勢いで拳が振り下ろされた。

「らったあ！」

どれほどの力だったのか、頭頂に拳を受けた男は前のめりに倒れることもなく垂直に潰れ、痙攣しながら泡を吹いている。

「これは、三角頭の分」

「う、うわあ！」

恐慌状態の男が鉄パイプを振り下ろしてくるが、構わず突き出された拳によって、その鉄パイプごと男の顎は粉碎されることになった。

「ふぁおあるっしゅ！」

人が出したとは思えないような悲鳴と共に後ろに倒れこみ、動かなくなる。

「わああああああ！」

悪夢のような光景を見て残った二人が逃げようと背を向け走り出した。だが見逃す気は無い。

「そして、これは姫さんを汚ねえ目で見た分だ！」

前に回りこむと、相手の走る勢いを利用して投げ、大地へと叩きつけた。その衝撃で周囲の木々が震えた。

「もうしないから許し」

「最後に、これは俺の、俺の怒りだッ！」

リーダー格と思しき男が何か言おうとしていたが、聞く気は無い。その価値も無い。拳のラッシュを叩き込む。吹き飛ぶことも許さず、十発、二十発……スコールのように拳が降り注ぐ。

「ごにゅばらあ！」

最後の一撃が腹に叩き込まれ、最後の一人もようやく倒れることを許された。

周囲に敵がいなくなった事を確認した男は握っていた拳を開き、

「てめえらに今日を生きる資格はねえ」

地面に倒れた山賊たちを冷め切った目でみながら、吐き捨てた。

「ハートお？　まだー？　もう目を開けてもいいのお？」

木立の向こうから血生臭さとは無縁の声が届く。それだけで直前までの張り詰めた心がふっと和らいだ。逃げ出した山賊を追いかけたせいで少し離れてしまった。と、思うと同時に我にかえる。こんな凄惨な現場を見せるわけには行かない。用意していた縄で山賊たちを拘束して、少女から見えないように木陰に転がしておく。後はこの町の住人が好きに処置を下げばいい。

「ハートお？　もおいしいかい？」

隠れん坊のように呼びかけて来る少女に自然と頬がほころんだ。目を閉じる直前の状況はわかっていているだろうに。俺が負けることは想像もしていないらしい。まっすぐに寄せられる信頼がこそばゆい。

「『だって、みんながいるし』、か」

それは外出の危険を訴える男に少女が返した言葉。緊張感の無い態度はその言葉が心の底からの物であったことを明瞭に示していた。ならばその信頼には結果で応えよう。少女の前では決して無様を晒しはしない。これまでも、これからも。

「ねえー、もう目、開けちゃうよ？」

「姫さん、もう少しだけ待ってくださいえ」

そう決意を新たにしながら、男は小走りに木陰から出て少女の下へと向かった。

白昼夢を見ていたらしい。

気づいてみればサイレント・ヒルの山林は影も形もなく、聖都周辺の荒野が広がっているばかりだ。いかん、集中しなければ。馬を操っている手綱を握り締める。

「ハート様、大丈夫ですかい？」

「……ああ問題ねえ」

トランシーバーから聞こえてきた部下に返事をするとき左右に首を振った。

今は警護中だ。気を引き締めなければ。

聖都周辺は定期的に巡回を行なっているため比較的治安も安定しているが、絶対安全と言うわけではない。僅かな異変も見逃さないように注意を払わなければ、とは考えはするものの平時のように集中できない。原因はわかっているのだが。部下が周囲にいる手前、顔は平静を装っていても悩みの種を意識するとため息が漏れそうになった。

そっと視線を後ろに向けるとそこには王族専用の馬車が走っている。馬車の窓は幕が下ろされており中の様子を伺うことは出来ない。その中にいる少女の顔を思い浮かべ、更には先ほど見た白昼夢を思い出し、ハートは更に落ち込んだ。どうやら予想以上に堪えていないらしい。

鮮花に口を利かないと宣言されてからまだ三日目。鮮花主催の茶会当日であった。

石を弾いたのか、馬車が少し揺れる。その振動で鮮花は目を覚ました。昨日は遅くまで菓子作りに追われていたせいか、疲れが溜まっているようだ。もっとも疲れている原因はそれだけではないが。まだ目的地には着いていないようで、馬車の速度は落ちていない。寝起きでぼんやりしている頭で、最近の記憶を振り返ってみる。眠ったお陰で少しは気持ちも整理されたのか、それともまだ頭が働いていないからか、先程までのような苛立ちは感じない。

一ヶ月って短いなあ。おやじさまの元気が無いなあと思って何とかしたいなあと思ったのが一ヶ月前。いい考えが浮かばなくて悩んでいた所に、おやじさまの独り言を聞いたのが三週間くらい前。それからティータイムがどういうものなのかをみんなで調べたのが二週間前。お茶を探しに行って帰ってきたのが一週間前。それからお菓子作りに挑戦したり、会場に飾り付けるといふ飾りを作ったり、雰囲気合う置物を搜したり、着ていく服を選んだり、いろんなことをいっぱいして忙しかったはずなのに。

「はやいなあ」

一日一日は長いのに、その長い一日が重なって一ヶ月になったのに、思い返してみるとあっという間に感じる。

「ふしぎー」

「何が不思議なんだい？」

「あっ、おやじさま」

娘が起きたことに気がついて、鮮花の隣に座っていた康夫が声をかけてきた。

「毎日がすごく長いのに、思い出す時は短いのはなんで？」

「うーん、難しいことを聞くなあ。パパの意見だけど、人の思い出は絵本みたいなものだからじゃないかな？」

「絵本？」

「そう。鮮花も大好きな絵本。人の記憶はあんな感じで、一ページごとに思い出が書かれているんじゃないかな。例えばご飯を食べた時のページなら、食べた物の絵と一緒にそれがどんな味だったのかとか、特に何がおいしかったとかという感想が書かれていたりして一日は確かに長いけど、絵本の一ページはすぐに読めるよね？」

「なるほど。おやじさまは凄いなあ」

鮮花は大きく頷いた。普段なら拍手もしているところだが、向かいの席でそれぞれ母のひざを枕にして眠っている妹達を見て、それは控えた。

「まだ着かないのかな？」

「……知らない。わたしのお茶会なのに、ハートが場所を秘密にするんだもん」

どうやら地雷を踏んだらしい。途端にご機嫌斜めになる鮮花を見て康夫は苦笑した。最近妙に口数が少なかったのはこれが原因らしい。

「めがねがおすすめの場合はありますって言っていて、他のみんなは見に行ったのに、わたしだけ教えてもらえないの。ハートがみんなに教えちゃダメだって言ったから、わたしだけ仲間はずれ……。おかしも作ったし、お茶の入れ方も練習したし、飾りも作ったし、始めのあいさつも考えて、みんなで楽しくやってたのに。……ハートのほか」

娘の機嫌を損ねるとはいつものハートらしからぬ行動だ。ならば

これから赴く場所はそれだけの価値があるということだろう。そう思うと目的地に興味が湧いてきた。はてさて、何が待っていることやら。

「もーっ、もーっ、ハートなんて知らないッ」

怒れる我が子の頭を撫でて宥めながら、康夫は胸中でそう一人ごちるのだった。

娘からお茶会への招待状を受け取ったのは四日前のこと。夕食の後、家族全員に手作りの招待状が渡された。娘に心配をかけていたのは親として恥ずかしいという気持ちがある。しかし。その為にお茶を摘んで来てくれた気持ちは凄く嬉しい。でも、その為にながを巻き込んで危険を犯したのだから気持ちは複雑だ。

危険ではあるが、無茶をしたのではないことはわかっている。誰にも秘密にして一人で外に出かけるようなことはせず、近衛隊に協力を頼んだことが何よりもそれを物語っていた。それは単純に懐いているからということもあったのかも知れないが、娘なりに自分のできることを把握した上で、自分の手が届く中で一番安全性が高い方法をとったのだ。

現指導者の立場からは後継の自主性の発露は好ましい面もある。更に今回結果として娘は近衛隊や図書館のホープとの関係を強化できたのだから。

しかしまだまとに交流がない町に無断で行ったことは怒ってもいいと思う。だからと言って育ち始めている自主性の芽を摘むようになってはいけないわけで。今回のように成果を挙げたのであれば尚更

だ。

教育って難しいなあ。

表情には出さず胸中でため息を吐いた。

「おっ、着いたのかな？」

馬車のスピードは落ちてきているらしい。車内に伝わる振動が徐々に小さくなってきていた。

会場では近衛隊で設営に回された男達が会場の最終点検を行っていた。手伝ってくれた村人と共に飾りの位置を確認している者。茶を入れる手順をペアになって確認している者。招待客の席の頭に叩き込んでいる者。湯を沸かしている竈の火加減を見ている者。燃料の薪の量を確認している者。そこかしこで真剣な様子で自分達の担当の仕事を確認している。

「てめえら、お嬢たちがもう着くらしいぜツ。準備はいいかあ」

「「「「おとおおお」」」」

モヒカン頭はいつもよりも丁寧に髪を整え、スキンヘッドはとおきの艶出しオイルを塗りこみ、いつもよりおめかしをしている。会場の飾りつけも済み、華やかさの演出はバッチリだ。

「ハート様の犠牲を無駄にすんじゃないぞ！」

「「「「おとおおお」」」」

ハートは隠しているつもりのようなだったが、普段の彼を知っている者からすれば落ち込んでいるのは一目瞭然だった。だから彼らは責任を感じていた。頼りになる兄貴分がそこまでダメージを受けているのは自分たちが原因なのだから。

実のところ、鮮花にこの場所を秘密にしようと提案したのは実のところハートではなく、会場を下見に来た彼らだった。鮮花は皆が下見に来たものと思っているようだが、仕事のシフトや立場の都合で今日初めてこの場所に来るといふ人間もそれなりの数に上る。ハートも実際に足を運んだことは無いのだ。それでも熱心に訴える彼らの意見を受け入れて、自ら泥を被ってくれたのだ。気合が入らない筈が無い。

その上今日は特別企画があるのだ。

「お嬢は茶会がひと段落したら俺達も参加する側に回っていいって言ってくれている。てめえら、服の準備はできているかッ」

「「「「おとおお」」」」

「眼鏡のッ」

「「「「度肝を抜いてやれ」」」」

いまこの場に居るのは二週間前鮮花の護衛から外れ、帝都に残った男達だった。三葉のアドバイスの元で各作業の基礎を叩き込まれる中、何度も言われる事になった、センスがないね、という言葉。

そんなことは男達も承知していたが、何度も言われるとムッとしてしまうのだった。確かにこれまでの自分達は罵られてもいい存在だったかもしれない。しかし、短い期間とは言え三葉の教えを受けた自分達は成長した。少なくとも何がオシャレであり、何が華やかなのかを学んだつもりだ。そう言う事もあって男達は密かにブティック古着倉庫へと通い、三葉を見返す服装の研究に入り、今日のための一張羅を準備したのだ。

馬の嘶きが遠くに聞こえていた。目を向けると小さく馬車とその周囲を護衛するハート達の姿が見えてきていた。

車内の揺れが止まった。馬車が完全に停止したようだ。ノックの後、一拍間が空いて馬車の扉が開かれた。

「会場に到着しやした。ここから少し歩きますんで、気をつけて降りてくたせえ。お嬢、手をどうぞ」

「ありがとう」

扉を開けてくれた近衛隊の手を借りて鮮花は馬車から降りた。道中ずっと揺られ続けていたせい、少し足フラつく。

「あっ」

一步踏み出そうとしたところで足がもつれてよろめいた。こけそうになったが、その前に横から伸びてきた太い腕が鮮花を支えた。

「ありが……」

言いかけた礼が途中で止まる。傾いた体をそっと立たせてくれた腕の持ち主は、

「姫さん、大丈夫ですかい？」

いまは顔を合わせたくない人物だった。

「もしかして馬車で酔っちまいやしたか？ それとも座りっぱなしで血の巡りが悪くなりやした？ 歩くのがキツイようだったら肩を貸しやすぜ」

「別に、いいよ」

心配そうに自分を見るハートから目を逸らし、支えてもらった礼を小さく述べると、鮮花は家族の元へと走った。フラつきは一時的なものだったようで、既に足取りはしっかりしている。

なら、最初からこけたりしなきゃいいのに。そしたらハートに助けられることは無かったのに。鮮花はため息を吐きなくなった

こっそり背後に目をやると、ハートがこちらの方を見ていた。いまの自分の失礼な態度も気にした様子はない。理不尽な話かもしれないが、鮮花にはそれが不満だった。

「ハートのほか」

最初に下見に連れて行って欲しいと頼んだ時は、その前にお菓子作りを勉強すべきだと言われた。次に頼んだ時は家族に入れられるようにお茶の入れ方を練習した方がいいと言われ、その次は飾りのデザインのアドバイスが欲しいと頼まれ、さらに次には開会の挨拶を考えておいて欲しいと言われた。それらについては鮮花も納得したし、不満も無かった。

しかしいざ準備が終わって会場を見に行きたいと行った時、ハートは当日まで秘密だと言って断った。飾りのセッティングについても眼鏡から助言を貰ったからわざわざ行く必要は無い、と。これには納得できなかった。

自分が茶会をやろうと言い出したのだ。だから手抜きをしたくなかった。会場がどんな場所なのか、自分の目で確認して置きたかったのに。でも結局自分たちを信じて任せて欲しいと言われては引き下がるしかなかった。それでもやっぱり不満はあって、口を利かないと宣言をしたのに。

「ぜんぜん効いてない……」

むしろ自分ばかり空回りしてダメージを受けている気がする。内心でため息を吐いた。

周囲の近い者たちから見るとそんなことはないのだが、鮮花は気づいていなかった。ましてや、いまハートが自分を見ていた理由が、鮮花の態度にショックを受けて呆然となって立ち尽くしていたからだとは、わかるはずもない。

この三日間、打ち合わせの時もハートには話しかけなかったし、目も合わせなかった。それぐらい怒っていたのだ。にも拘らず、ハートは気にする様子は無く、先ほどのように鮮花のフォローをしてくれている。元々怒りが持続する性格ではない鮮花は、助けられてもまともにお礼も言わない自分に罪悪感を持ち始めていた。

落ち着いて思い出してみると、下見を断った時のハートはおかしかった、ような気がした。何日もかかる外出は許してくれたのに、近場への下見を断るのも変な気もする。もしかしたら何か理由があるのかもしれない？

数日経ってようやくそんな考えに至った鮮花であったが、それならそれで理由を隠されていることが不満だった。説明してくれればきっと納得できるし、また話しかけられるのに。もう三日もハートの肩に乗っていない。

ハートを許したくてもきっかけが無い。助けてくれていることにお礼を言いたいけど、それは仲直りできてからだ。

解決を求めて疑問符が頭の中をぐるぐる回っても、答えは一向に出てこない。モヤモヤとした気分ばかりが胸の内に募っていき、

「……ハートの、ばか」

小さな呟きとなって外に零れ落ちた。

うんうん唸る鮮花を含む一行は、到着した村の外れに向かっていた。そこには遠目にも紅白の幕で囲まれている区画がある。幕に遮

られて中の様子は窺えないものの、『歓迎！ おやさまご一行』と書かれた鮮花謹製の看板が掲げられていることから、あれが会場に違いない。

一同の予想通り紅白幕の前には近衛隊の男が二人立っていた。三葉の指導の賜物か、二人は共にスーツを身に着けている。もともと黒いスーツにサングラス、スキンヘッドの強面が並び立つ姿は、いっつもよりも威圧感が三割り増しだった。

「ようこそいらっしやいました！」

「お待ちしてやが、おりました！」

少し囁みかけたようだが挨拶は及第点。声が大きいのはご愛嬌。お辞儀も丁寧だ。余ほど練習したのだろう。いつもの様子を知る康夫たちは目を丸くした。

「うん、今日は楽しませてもらうぞ」

「ハッ！ お任せください」

「では、御席へご案内致します。こちらへどうぞ」

男達は客人たちの列の前後に別れてゆっくりと誘導を始めた。幕は二十メートル程先で途切れている。そこから会場内に入るのだろう。

「……お嬢」

列の最後尾についた男が、目の前で足取り重く歩いている鮮花に囁きかけた。

「迷惑をかけたようで、すいやせんでした」
「え？」

急に謝られてキョトンとなる鮮花。考え事をしていて下を向いていた顔を上げて、男を見た。

「この場所のことを秘密にして欲しいと頼んだのは俺たちなんです。ハート様は何も悪くねえんです。ただ、頑張っているお嬢に、ここに来るなら下見の為なんかじゃなくて、聖帝様と一緒に来て欲しいと思ったんです。この後でどんな罰でも受けやす。俺が言うのもおこがましいですが、どうかハート様と仲直りしてください」

突然の告白に目を白黒させる。情報量の多さに理解が追いつかない。秘密にしたのはハートじゃない？ みんなはなんで秘密にしたの？ 罰なんてどうでもいいから教えてよ！

軽いパニックに鮮花が陥った時、前から歓声が聞こえた。足が止まっていたようで、康夫たちは既に会場の中へ入ったようだった。ただ一人、ハートを除いて。

足を止めた鮮花たちを不思議そうな眼で見ているハートと視線が合い、パニックは唐突に収まった。

じゃあ、ハートと仲直りしてもいいの？

全く問題ない！

塞いでいた気持ちもちがいに吹き飛んだ。

「ハート、行こう！」

「姫さん？」

先ほどとは全く違う様子の鮮花にハートは困惑した。が、そんなことはお構いなしにハートの手を握った鮮花は、そのまま引っぱり張って会場に入った。

そして言葉を失った。その後ろではハートも眼を奪われている。

幕の内側。

角の先には、春があった。

「うわー、うわー、うわー！」

忘我の境地から帰ってきた鮮花は他に漏れず歓声を上げた。興奮のあまり握った手をぶんぶん振り回しているが、目を奪われているハートはなすがままである。

「桜、か」

物心つく前に見た記憶があるような気がする。『大災害』が起くる前。もう顔も思い出せない両親と一緒に。

そこには満開の桜があった。一本や二本ではない。沢山の木々が立ち並び、風に花びらが舞っている。

その様子を始めて桜を見た者たちははしゃいで、昔見たことのある者たちは無言で見つめていた。

「……では、こちらへどうぞ」

しばらくして場が落ち着きを取り戻した後、改めて席への誘導が行なわれた。

「おや、あちらは？」

「場所を貸してくれたこの村の皆さんです。準備も手伝ってもらったりしたので、その礼も兼ねて今日の茶会にお誘いしました！」

先客がいたことに驚いたが、納得した。同時にここがどこであるかを理解して、後でサザンクロスの代表として挨拶に行くことにした。

皆が着席したところで菓子が運ばれてくる。会場にはいくつも円卓が運び込まれており、円卓一つに専任の給仕がついた。今回の主賓である康夫たちの席は主催者の鮮花が担当した。鮮花は練習の成果を存分に発揮して、手馴れた様子で康夫たちに茶を注いだ。

「それでは茶会の開催にあたりまして、主催者であらせられます聖都サザンクロス第一王女、鮮花様にご挨拶をいただきたいと思います！」

全員に茶が行き届いたところで、司会のモヒカンから鮮花に声がかかった。

会場の中央に用意された台に乗ってまずは一礼。周囲を見回しながら鮮花は口を開いた。

「皆様、本日はご足労ありがとうございます。この村の方々に置かれましては、場所の提供のみならず準備まで手伝っていただき、本当にありがとうございます」

村の住人たちに向けて一礼。それに合わせて近衛隊も頭を下げた。

「今日は天気もよく、桜もこんなに綺麗で、絶好のお茶会日和です。皆で楽しい時間を過ごしましょう」

もう一度周囲を見回しながら、近衛隊の一人一人の顔を順に見ていく。その視線は最後に一際大きな男で止まった。目が合って、自然と頬がほころんだ。

「そして、わたしの思いつきに付き合ってくれたみんな、ありがとう！ みんなのお陰で凄いいことができたよ。今日まで本当にありがとう。そしてこれからよろしく。みんな大好きだよ！」

男達から歓声が上がった。中には涙ぐんでいる者もいる。周囲から自然と拍手が沸き、大いに盛り上がる中で茶会は始まった。

仕事を片付けるのに予想以上に時間がかかってしまった。最近、茶会の為の指導に時間を費やしていたことで溜まっていたツケが回ってきたのだ。ハートたちが出発したのが二時間前。馬車を飛ばすとしても、どれだけロスを縮められるか。着替えや諸々の準備は馬車の中で済ませてしまおう。今日のために仕立てて貰った服を入れた包みを持って足早に向かう。そのせいで角を曲がってきた人影とぶつかってしまった。

「あ、失礼しました」

「おう三葉じゃねえか。俺の所から貸した物は役に立っているか？」
「その節はありがとうございました。お陰さまで助かっています」

小柄な老人は陶芸部門を統括している老人だった。今頃茶会で活躍しているであろう急須や湯飲みは老人の部門で資料として保管されていたものなのだ。

「なんかの実験で使うらしいが、壊したりすんじゃないぞ？ 折角

『大災害』を潜り抜けた代物なんだからよ」

「はい、勿論です」

世話になった手前、本来なら目の前の老人も誘うのが筋なのだが、ある理由を持って三葉は秘密にしていた。

「このお礼はまた後日にでも改めて。では急ぎますので失礼します」

頭を下げて再び歩き出そうとして、先ほどぶつかった時に包みを取り落としたことを思い出した。

「ほれ、落としたぞ」

「ありがとうございます」

包みを受け取って場を辞そうとした背中に声かけられた。

「んな一張羅持って何処に行くんだ？」

結び目が甘かったのか、落ちた拍子に緩んで中身が見えてしまったのだろう。

「これは、ですね」

とっさに言葉が出てこなかった。普段の自分の行動パターンを知っている人間から見れば奇異以外の何でもないだろう。日の出から

日没まで部屋に籠って読書と仕事をしている自分が、こんな昼間から着替えと思しき物を持って出かけようと言うのだから。

「いやあ若いねえ。仕事をはやく片付けて作った空き時間でデートか」

「違います」

「じゃあなんだ？」

即答してから後悔した。変な噂が立つことになるかもしれないが、この場合は合わせておくだけで余計な追求はされなかっただろうに。迂闊だった。

「……：そういや外に馬車が止まっていたな。その様子じゃあ、ありや三葉を待ってんのか」

よくない流れだ。目の前で推測が進んでいく。こうなったら多少失礼な形にはなっても強引に話を切り上げた方が得策かもしれない。

「すみません。急ぎますので……」

「そうか、花見だな！」

その言葉に背中が反応してしまった。

「凶星だろ。昼前に康夫達が出かけたって話を聞いたから不思議に思ってたんだ。そうか、あいつら今頃酒飲んでやがんだな」

「聖帝様と呼んでください。この国の王ですよ」

「あいつが名前で呼んでいいつつたんだからいいんだよ。それより酒か、宴会か！」

目を輝かせる老人を見て、三葉は隠すことをあきらめた。この老人。普段は気のいい御仁なのだが、大の酒好きで、宴会と聞けば飛

び込まずには居られないのだ。

「いえ、今日はお茶会です。姫様が遠出して茶を摘んでいらっしやったので、それを桜の下で楽しむ集まりです。ですので今日の所は……」

「ばっかやろう、桜といったら花見。花見といったら酒。酒といったら宴会だろ！ ああ今日の仕事はやめだやめ。今日は陶芸部門の花見に変更だ。三葉、桜の場所を教えろ。準備ができれば俺達も向かうからよ」

もう聞く耳を持つてはくれなさそうだ。ため息を吐いて観念すると、村の場所を白状したのだった。

遅れてきた三葉から経緯を聞いて、

「じゃあこの後、先生達も来んのか？」

「ああすまない。僕のミスだ」

まあ別にいいんじゃないか、と出迎えに来たハートは思った。こんな感じで穏やかな空気のお茶会もいいものだが、皆騒がしい宴会も好きなのだ。お茶会が一区切りついたら宴会に切り替えればいい。姫さんも満足したみたいだな、とはしゃぎ疲れて父親のひざで寝ている鮮花の姿を思い出した。

「それより、お前も茶を飲めよ。俺も飲んでみたが美味かったぞ。あっちであいつらが待っているぞ」

「僕を待っている？」

「何でも一張羅を用意してきたらしいぞ。さんざん美的センスが無いと言われたから見返してやるんだと。どんな服なのかは俺も知らないが」

あの体力馬鹿達もオシャレに興味を持ったらしい。ふむ、面白いじゃないか。三葉の口元に小さな笑みが浮かんだ。なら、見せてもらおうじゃないか。

「どうせいつものレジャージャケットの色をかけてみたとか、ショルダーガードを新調したとかその程度なんだろうけどね。まあいいさ。僕が点数をつけてやろうじゃないか」

ハートに案内されて会場まで案内される道の途中。

「そういや、それが茶会のために用意したって言う服か？ 似合ってんじゃねえか。袴っつーんだっけか？」

「ふん、世辞はいい。しかしこの着物の色はいいだろう。淡いピンクに紅白の花びら。この季節には相応しい色彩だろう？」

人気の生地だったから注文するのに苦労したんだよ、と自分の服を見て三葉は楽しそうに笑った。

「しかし、君達もこの服には感謝しないといけないよ」
「どういうことだ？」

着物に感謝、といわれて首をかしげた。

「この着物のお陰でこの村に桜が生えていることがわかったんだからね」

「着物で？」

驚くハートに、そうさと三葉は頷いた。

「この淡い色はね、桜の幹を使って染めているんだよ。以前染色に
関する本を読んだ時に知っただけだね」

「なるほどなあ」

友人の博識ぶりにハートは感心した。

三葉の席に到着すると、そこには三葉が指導した男達が勢ぞろいしていた。どうやら既に着替えているらしく、その身体は大きなマン
トですっぽりと覆われて、その下にどんな服を着込んでいるのかわ
からない。だが余程の自信があるのだろう。どの顔にも不適な笑み
が浮かんでいる。

「ヘッ、遅かったじゃねえか。待ちくたびれたぜえ」

「すまないね。何せ忙しい身の上でね」

三葉の前に茶と茶菓子が運ばれてきた。

「さすがにあれだけ教えると上達したね。茶も上手に入れているじ
ゃないか。この菓子も見た目も悪くないし……味も悪くない」

「ふん、上達したのはそれだけじゃねえぜ。俺達はあるたのお陰で
華やかさって言うのを学ばせてもらった。美的センスってやつもな」

スキンヘッドの言葉に周囲の男達も頷いた。

「ほお、大層なことを言うじゃあないか。じゃあ見せてもらおうか
な。その自慢の一張羅とやらを」

さてどんなものが出てくるのやら。二杯目のお茶を飲みながら三

葉は想像した。これまで普段の世紀末スタイル以外の服装をしたことが無い彼らがどのような方向性で決めてきたのか。燕尾服？ それとも僕のように和装？ あの一週間が君達にどんな指針を与えたのか、実に興味深い。

「じゃあ、見て度肝を抜かしやがれ」

一斉に男達はマントを脱ぎ捨てた。同時に三葉はお茶を噴出した。飛沫が陽光に反射してきらきらと輝く。

「どんな方向性だッ」

悲鳴のような、いや悲鳴があがった。震える三葉の指先には変わらぬ位置に男達がいる。

「へっへっへっへ、俺達に見惚れたかあ？ ハッ美しいってよお」

「そう、俺達の結論はフワフワ×フリフリ＝華やかさ。この公式だ。おめえから借りた資料から導いたんだから間違いないえ」

「間違っているだろうとても解かりやすくッ」

少女漫画から抜け出した、夢のように華やかなパーティードレスを悪夢のように着込んだ男達がそこに立っていた。いや、それだけではない。リボンやフリルをふんだんにあしらったゴシック・ロリータに身を包んだ者もいれば、清楚な純白キャミソールを着ている者もいる。

「へっへっへ、度肝を抜かれたみてえだな。毎日のようにセンスを磨けって言われてよ、色々勉強したんだぜ。そしたら華やかって言われているのはこんな服を着ている奴が多かった。スカートなんて女が穿くもんだと思っていただけだよ、どうやら男が穿いてもお

かしくないらしいぜ」

「キルトかッ！ キルトのことかッ！ あれとそれとは全く違うだろう」

引き合いとして少女漫画を引用したのが間違いだったか。額を汗が流れた。

「最初は気恥ずかしかったけどよ、慣れてくると楽しくなって来るんだぜ」

「だよな。このスカートの中に風が吹き込んでくる感覚が新鮮で楽しいし」

「華やかな格好って気持ちいいよなあ」

普段のケンカ腰の口調とは違う、穏やかな話し振り。これはもう手遅れかもしれない。

「心、こいつらを止めてくれ。こいつ等は地獄の門を開けようとしているぞ」

「女装ぐらい別にいいんじゃないか。誰に迷惑をかけるでもなし、こいつらも楽しそうだし」

「僕が迷惑しているだろうが。こいつらを見続けていると精神に深刻な傷を負いそうだ」

三葉の言葉は男達のハート様、話がわかるう！ という歓声に掻き消された。

「少女漫画を貸し出したのが失敗だったのか。これまで少年漫画一辺倒だった奴らには刺激が強すぎたのか」

三葉が頭を抱えていると、さらに追い討ちがかかった。

「なんだ、もう宴会芸の時間かよ。女装たゝ近衛隊も気合入ってるじゃねえか」

来る馬車の中で既に飲んでいたのだろう。乗りつけた馬車から真っ赤な顔をした男達が次々に降りてくる。中には馬車から降りてそのまま地面に蹲っている男もいた。

「でもよ……おめえら宴会芸で負けんじゃねえぞ！ 陶芸部門の意地にかけて盛り上げろッ」

村人達を巻き込んであつという間に宴会の準備が整えられていく。まだ茶会の空気をまともに味わっていないというのに。御座の上に座らされ、上機嫌の老人に杯を渡されながら、三葉はひっそり涙した。

今日はいい日だ。杯を片手に康夫は、昇ったばかりの月を見上げた。膝の上にははしやぎ疲れて眠ってしまった娘がいる。お茶会的主催、ご苦勞様。目を細めて、空いている手でその頭を撫でた。絹のように滑らかな手触りが心地良い。

「今日は、いい日だ」

今度は口に出して呟いてみた。この場所に自分のしてきたことの全てがある。人がいて、物がある。笑顔があつて、喜びがある。希望があつて、夢がある。

かつての大人は老人になり、かつての子供は大人になった。いまを笑って生きている彼らなら、老人から受け継いだ知識を正しく使って、これから生きていけるだろう。そして次の、娘達の時代が

来てもきつと。

『大災害』後に産まれた娘達には、かつての世界は絵本の話のように思えるだろう。空想はできても実感は無い。たった二十年前のことなのに。ずいぶんと遠くに來た気はしても、昔の風景は昨日の事のように思い出せるのに。気がつけば時間は過ぎていて、世界はあつという間に変わっていく。

ふと馬車の中で交わした娘との会話を思い出した。

「毎日は長いのに思い出すと短い、か」

まったくその通りに違いない。いつか自分がこの世を去る時が来て、生涯を振り返ってもそう思うに違いない。だからこそ気づける事もある。すぐに過去を振り返ることができるから、過去から現在に至るまで、自分の中で、皆の中で、変わらないものがあるということ。

今日は自分を心配した娘が頑張ってくれた。そんな娘を見守り、手伝う大人がいてくれた。

願わくば、これからも皆が優しい気持ちを持ち続けてくれますように。

何に祈るのでもなく、康夫はそう思った。

周囲が賑やかだったせいか、身じろぎをした娘の目が少しずつ開かれていく。この娘が瞳に映す世界が少しでも輝いているように、これからも頑張ろう。そんな決意と共に康夫は勢いよく杯を傾けた。

ある日突然世界は終わりを迎えた。あらゆる秩序が乱れ、暴力が正義となった時代。これはそんな世界の片隅で、変わらないものを抱き続けている人々の物語である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6309s/>

聖帝様、お茶を飲む

2011年4月25日17時29分発行